

東京・明治大学記念館前遺跡

めいじだいがくきねんかんまえ

1 所在地 東京都千代田区神田駿河台二丁目

2 調査期間 一九九五年(平7) 一月～一九九六年三月

3 発掘機関 明治大学記念館前遺跡調査団

4 調査担当者 代表 小林三郎

5 遺跡の種類 武家屋敷跡

6 遺跡の年代 江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(東京東北部)

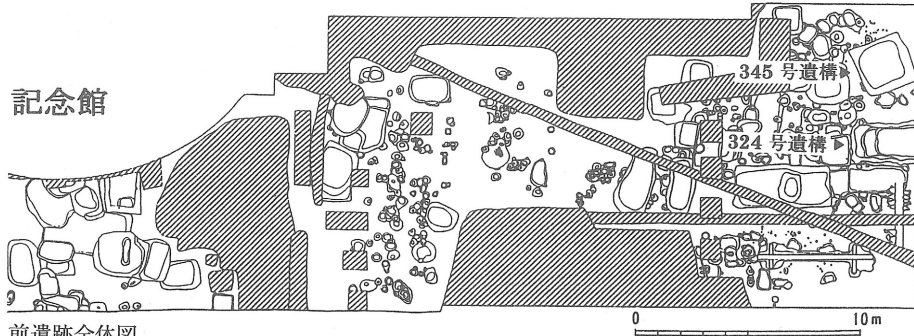
明治大学のある神田駿河台の地は、その名が示すように駿府の地において徳川家康に仕えた旗本たちが、家康の死後、江戸へ移った

際に与えられた土地である。大学構内の再開発に伴う発掘調査の対象となった記念館及び一号館の敷地を、現存する数枚の絵図と照らし合わせてみると、南側は幕末まで中坊家の屋敷があったことがわかる。中坊家は、室町時代には足利將軍家に、

大坂夏の陣・冬の陣では家康に仕えた家柄であった。江戸時代には四千石の大身の旗本として奈良奉行をはじめ、駿府町奉行や日光奉行といった遠国奉行を務める家柄であった。中坊家が駿河台の地に屋敷を拝領した時期は詳らかでないが、爾来幕末に至るまでのおよそ二百年間この地に屋敷を構えている。一方、北側は土地の傾斜に沿って雑段状に隣接する三軒の旗本屋敷であった。その拝領者は時代とともに変遷するが、いずれも石高五百石以下の旗本である。

本遺跡の調査成果は現在整理作業の途中であり、詳細は今後の分析を待たねばならないが、ここでは出土した木簡のうち七点について、現段階において述べ得る範囲で紹介する。

調査区は屋敷の境をなしていた



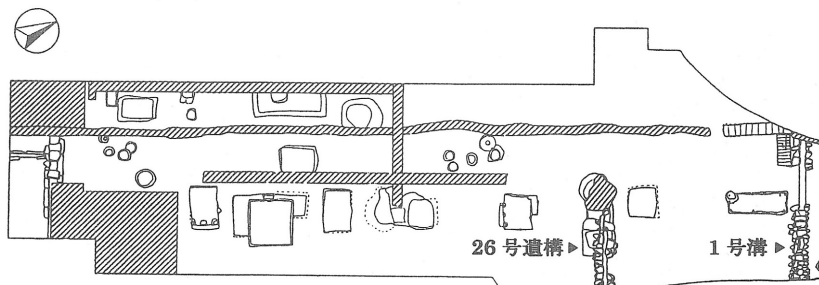
前遺跡全体図

と考えられる溝によって、南側と北側とに分けられる。南側の調査区では、二六号遺構から(1)(2)が出土した。二六号遺構は長軸一・五m、短軸一・一m、深さ一・二mの不定形を呈する土坑である。木簡の他、陶磁器・土器・木製品が出土した。磁器は全て肥前製で一七世紀後半から一八世紀前半の製品である。陶器は肥前製の他に、瀬戸もしくは美濃製のものが認められる。磁器と同様に一七世紀後半から一八世紀前半の製品である。木製品には曲物や箸、漆器椀、羽子板などがある。

北側の調査区では、三二四号遺構と三四五号遺構から木簡が出土した。(3)(4)が出土した三二四号遺構は、長軸三・〇m、短軸一・八m、深さ〇・六mの不整な長方形を呈する土坑である。出土した陶磁器から、その廃棄年代は一八世紀中葉から後半に位置付けられる。木簡は一三点出土した。

(5)~(7)が出土した三四五号遺構は、一辺二・二m、深さ一・四mの土坑であり、本遺跡のなかでも遺物量が最も多い遺構の一つである。木簡は九点出土した。三四五号遺構から出土した陶磁器はいずれも一八世紀前半の製品である。磁器は全て肥前製、陶器は瀬戸もしくは美濃製のものの他に、京焼の製品もみられる。特に京焼の椀の中には、絵付に元文四年(一七三九)の天文曆が施されたものが一点あり、遺構の廃棄年代を推定する際の指標となる。また焼塩壺には「サカイ／泉州磨生／御塩所」の刻印を有するものがある。こ

絵図	発行	北側居住者(1)	北側居住者(2)	北側居住者(3)	南側居住者
「駿河台小川町図」	明和元(1764)	水野清蔵	大久保喜右衛門	東條猪兵衛	中坊左近
「新編江戸安見図」	弘化5(1848)	水ノ	大クボ	トウテウ	中ノボウ
「駿河台小川町図」	嘉永3(1850)	堀三左衛門	大久保喜右衛門	亀井吉十郎	中坊陽之助
「駿河台小川町図」	慶応元(1865)	溝口五左衛門	大久保嘉左衛門	亀井与一郎	中坊陽之助



明治大学記念館

の資料は府内城三の丸遺跡の出土例から、一七四〇年代に位置付けられている。なお、三四五号本遺構からは羅字や曲物、下駄といった木製品が多量に出土している。とりわけ五六点の漆器碗は、該期の什器組成を明らかにする上で注目される。

8 木簡の釈文・内容

二六号遺構

(1) 「江戸駿河台

中坊長兵衛荷物 式拾式固之内

「□老桶貫目式貫式百目 辻七右衛門

小橋茂兵衛 辻理右衛門

(2) 「中坊長兵衛 荷物カ

「木□本吉兵衛 荷物
木下□兵衛

三三四号遺構

(3) 「葛下郡如意村

和田甚右衛門
大坂弘

(4) 「御部や

御茶ノ□□□
同□□かい

「御茶や
両所

三四五号遺構

(5) 「延享カ
□□四年右カ

東条平左衛門組之内
卯六月 宮重八郎左衛門

「東条平右衛門 黒印カ

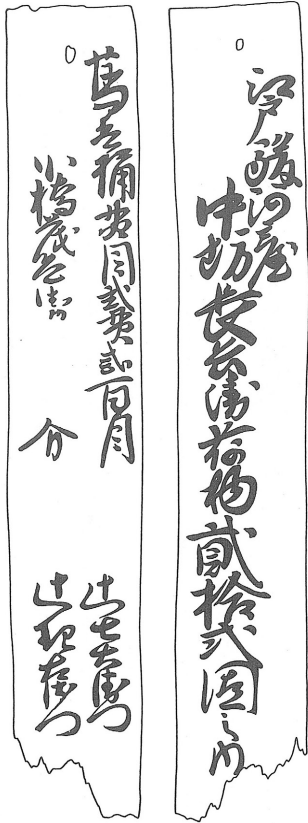
(6) 「本多備前守

「東條平助

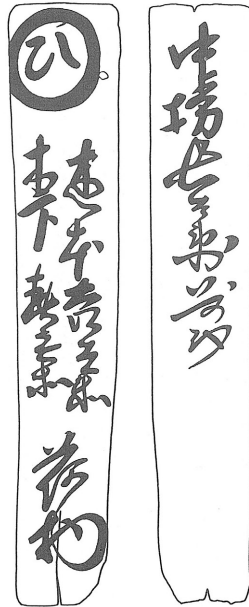
(7) 「東條源五郎様

「中□」

二六号遺構から出土した(1)(2)はともにほぼ完形品で、文字の残りも良好である。前項で指摘したように二六号遺構は調査区の南側にあたり、幕末まで中坊家の屋敷として利用されていた。出土した二点の木簡にも中坊の名が認められる。(1)は表側に「中坊長兵衛荷



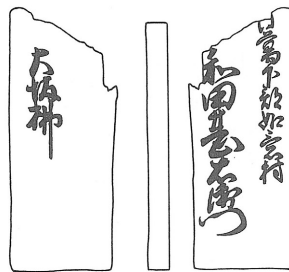
(1)



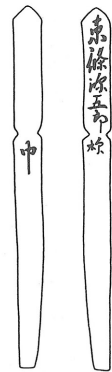
(2)



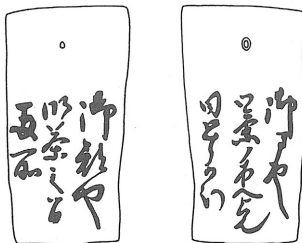
(6)



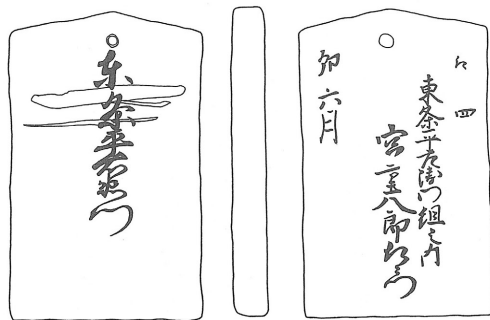
(3)



(7)



(4)



(5)

物」とあることから、中坊長兵衛の屋敷に持ち込まれた物品の荷札であることが窺える。また裏面の辻七左衛門ら二名が、この荷物を駿河台の中坊屋敷に送った送り主であろう。辻七左衛門は中坊家の家老であった。裏面の「□壱桶貫目式貫式百目」が、荷物の内容を示していると思われる。品目名の□は、薦、あるいは草冠に馬と書いて「まぐさ」の意を表わそうとした可能性もある。二二個の荷物の中の一つである。また「小橋茂兵衛□□分□□」とあるが、小橋茂兵衛は屋敷内の長屋の住人であった可能性もある。(2)も中坊長兵衛屋敷宛の荷物の荷札である。裏面の木□本吉兵衛と木下□兵衛〔惣カ〕に關係のあった荷物であろう。その具体的な内容は本資料からは不明である。裏面上部の④は屋号であろう。

(3)は北側の屋敷地にあたる三二四号遺構からの出土である。前述したように本遺構の廃棄年代は一八世紀中葉から後半にかけてであり、この年代に近い明和元年(一七六四)版の「駿河台小川町図」によると、本調査区にあたる屋敷は東條家のものであったことが窺える。(3)は上部を欠損した状態で出土したが、欠損した部分には国名が記されていたと考えられる。如意村は大和国葛下郡上太田村のことで、東條家の領地であった。現在の奈良県当麻町にあたる。和田甚右衛門については詳らかでない。(4)は部屋に関する記述であるが、詳細は不明である。

(5)~(7)が出土した三四五号遺構も北側の屋敷にあたり、いずれの

木簡にも東條という名が認められる。(5)は宮重八郎左衛門の身分を明かす鑑札である。内容は宮重八郎左衛門が東条平右衛門の家臣であることを示し、裏面には主人である平右衛門の署名捺印がある。

また表の元号を延享とすると、延享四年は一七四七年にあたり、これは遺構の廃棄年代とも一致する。(6)に認められる本多備前守を名乗る人物は数名知られている。そのうち本多貞尚が備前守に叙任されたのは、享保一四年に叙任された志摩守をある時点で解任されて以降、彼が死亡する延享二年までの間であり、遺構の廃棄年代に最も近い。本多貞尚は紀伊で徳川吉宗に仕え、享保元年(一七一六)に江戸へ移った人物である。(7)は東條源五郎に宛てた荷札である。裏面の「中□」〔鳴カ〕とあるのが送り主であろう。

本遺跡の文献史的知見については、明治大学刑事博物館の伊能秀明氏の調査に負うところが大きい。氏には本稿で紹介した木簡の積読にあたってご教示をいただいた。また、明治大学記念館前遺跡調査団の島村時子、三谷菊子、小池幸枝、小松政毅の各氏には実測作業のご協力をいただいた。

9 関係文献

明治大学記念館前遺跡調査団「江戸駿河台の旗本屋敷 明治大学記念館前遺跡発掘調査概報」(一九九八年)

伊能秀明「法制史料研究2」(巖南堂書店 一九九七年)

(追川吉生(明治大学博物館))